

学問は事をなす術なり —福沢諭吉 実業のすすめ—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

一万円札の肖像でおなじみの福沢諭吉(1835-1901)は福沢山脈と呼ばれる有能な門下生を輩出した。仰ぎ見る山の連なりのように経済界で大成した企業家群像は福沢の教育理念の結晶といってい

いだろう。世俗の人でありつづけた福沢は慶応義塾の創設を通じて官尊民卑の封建的な風潮に叛旗を翻す。仰々しい権威を嫌い、どれほど政府に請われても官職に就かず、御用学者にもならず、みずから唱えた独立自尊の精神を堅持した。

市井の生活と乖離した机上の学問を虚学として斥け、実際の行動に結びつく実践的な学問を実学として奨励した。福沢の薫陶を受けて実学を民間主体の実業として活かそうとした青年たちが近代

独学した英語で欧米へ

福沢は豊前中津藩(大分県中津市)の下級武士の次男として大阪の中津藩邸で生まれた。大阪に出向していた父が生後まもなく病死し、母子6人で中津に戻る。

少年時代に漢学を学び、学問で身を立てることを志す。だが閉鎖的な門閥制度=身分制度に阻まれ、のちに「門閥制度は親の仇」と語るほど深い憤りを感じる。

21歳のとき一念発起して長崎に赴き、オランダ語による医学など当時最先端の蘭学を学ぶ。翌年、蘭学者で医師の緒方洪庵が大阪で開講した適塾に

入門。やがて塾長となり、25歳のとき藩命で江戸へ出て慶応義塾の母体となる蘭学塾を開く。

時代は移り変わろうとしていた。

日米修好通商条約が締結され、幕府が海外に開港した横浜を訪れたとき、

得意のオランダ語で西洋人に話しかけたところ、まったく通じなかった。すでに英語が主流になっていたからだ。辞書だけを頼りに福沢は独学で英語の勉強をはじめた。

1860年、幕府の軍艦奉行の従僕となって勝海舟らと共に威臨丸に乗り込み、念願の渡米を果たす。横浜からサンフランシスコ経由でワシントンに向かい、半年後に帰国。翌年、遣欧使節の翻訳方としてヨーロッパ諸国を歴訪した。

1866年、みずからの洋行経験と原書による研究に基づき『西洋事情初編』を刊行。翌年1月から遣米使節の随員としてふたたび渡米した。6月に大政奉還が行われ、徳川幕府は終焉に向かう。

1868年、35歳になった福沢は芝新銭座に塾を移し、ときの年号にちなんで慶応義塾と名づけた。旧幕府軍の彰義隊が上野で官軍と戦っているとき、砲声が轟くなかで経済学の講義をつづけたという



福沢諭吉

逸話が残されている。薩長を中心とした新政府が樹立され、同年9月に明治元年を迎えた。

一身の独立なくして

明治政府から再三にわたって出仕を命じられたものの、福沢はいっさい応じなかった。慶応義塾を三田に移し、史上初の授業料制度を取り入れて生計を立てた。

教育活動と共に著作活動に精を出し、1872年に『学問のすすめ』の初編を上梓する。1876年まで全17編に及ぶ同書は学問の効用を説いて異例のベストセラーとなった。

冒頭にある「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という有名な一節には「と云へり」という言葉がつづいている。アメリカ独立宣言で謳っている自由・平等・公正の精神を福沢なりに意識したことがうかがえる。「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし」と断言する福沢は「されども、いま広くこの人間世界を見渡すに、賢き人あり、愚かなる人あり、貧しき人あり、富める人あり、貴人もあり、下人もありて、そのありさま雲と泥との相異なるに似たるは何ぞや」と読者に問いかける。

明治維新によって封建制度は終わりを告げた。だから「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざることによって出来るものなり」と福沢は答える。

それではいったい何を学ぶべきなのか。「読書は学問の術なり、学問は事をなすの術なり」とあるように実践的な学問として社会生活に役立つ実学だ。とりわけ福沢は「我が国の形成を察し、その外国に及ばざるものを挙げれば、曰く学術、曰く商売、曰く法律これなり」と学術・商売・法律の分野における実学を重視した。

実学の根底に流れているのは独立自尊の精神だ。福沢は「一身の独立なくして一国の独立なし」と国家ではなく個人の独立を優先した。まず個人が自尊心をもって精神的な独立はもとより経済的な独立を果たさなければ欧米列強と肩を並べる一国の独立もありえないと主張する。

官僚が幅をきかす国家本位の官尊民卑の風潮に福沢は我慢がならなかった。後年『文明論之概略』で文明とは「天下衆人の精神発達」と書き記した

ように天下衆人が主体となる世の中をめざした。

権威を嫌った着流し姿

1874年、英語のspeechを演説と翻訳した福沢は独立自尊の精神を広く伝えるために三田演説会を開始する。ちなみにlibertyを自由、societyを社会、economyを経済と訳したのも福沢だ。

翌年には慶応義塾内に三田演説館を設立。ここで福沢は「成学即身実業の説、学生諸氏に告ぐ」と題した演説を行い、塾生たちに「学問に志して業を卒らば、その身そのまま即身実業の人たるべし」「よく今日の時勢に応じ、成学即身実業の人たらんことを勧告する」と訴えた。

実業とは社会生活に役立ち公益をもたらす企業活動とあっていい。官尊民卑で貶められた商いの概念を抜本的に変えようとした福沢の期待に応じて三菱の荘田平五郎、三井の中上川彦次郎、三越の日比翁助、阪急の小林一三など錚々たる実業家たちが福沢山脈の岩盤を築いていく。

1880年、日本初の実業家の社交場となる交詢社を発足。2年後に出版事業に参入し、経済記事を特色とした日刊紙の時事新報を発刊した。

53歳になって全国漫遊を思い立ち各地を旅するようになる。1890年、新たに慶応義塾大学部を立ち上げて文学・法律・理財の3科を開設。著作活動では『尚商立国論』や『実業論』を書き上げて持論の実業思想を深めていった。

1898年、口述筆記による『福翁自伝』脱稿後、脳溢血症を患う。3年後に再発し、68歳で他界した。戒名は大観院独立自尊居士。葬儀には約1万5千名が参列し、男女同権論を唱えていたためか女性の姿が多かったという。

権威主義を徹底して嫌った福沢は生前「大臣の称を改めて番頭と呼び、書記官を改めて書記または手代となす」といった文章を残している。総理大臣の伊藤博文から官邸の仮装舞踏会に招かれたときも「断」という文字をことさら大きく書いた手紙を送って断った。

服装にもこだわり、どんな場所でも着流し姿で通っていた。武士が威儀を正す場合、羽織に袴を着用する。袴を着けない商人風の着流し姿は福沢が天下衆人と共にあることを意味していた。